



季壽
註解改正古今博物彙
三月
三





三月部目録

△卯あつひ併借
の季と持物入

○養生の法。雨風の考。米乃豊
年。妙茶その外人家重宝のこ
慮々小粒多ありゆへ
月録ふこれとあるます

三月

陰陽生 異名並註

清明節

△此化の期と知

穀雨

△花盛の期

八十八夜

△土用 日天氣

月日令

此部ふり二月日の定とす
事支の定りたるはあす

来子

△松尾明神御出

天手経供養

△御燈北平奉

鶏闘

△上巳節

重三

△流鏑會

鞠節

△桃花節

折ツグ

△桃酒

草餅

△蓬餅 △菱餅



△花見酒 △尋花 △花
△落心 △花 △花 △花

△海棠 △白輪 △桃の花 △桃の花 △桃の花

△李の花 △揚梅花 △六丁

△杏の花 △葡萄の花 △七丁

△林檎花 △赤花 △七丁

△梨花 △木瓜花 △八丁

△木蓮花 △胡桃花 △今

△辛夷花 △今 △今

△映山紅 △藤の花 △下

△月季花 △石楠花 △下

△沈下花 △山吹 △下

△小米花 △五味子 △下

△木通花 △天南星花 △下

△今法 △春蘭花 △下

道灌草 △淫羊藿 △下

△春菊 △東山菊 △下

△栴花 △櫻草 △九輪 △下

△海老根 △あじさい花 △下

△丁子草花 △仙臺秋 △下

△華蔓草花 △磁米菜 △下

△母子草 △小粉團花 △下

△馬酔木花 △換枋花 △下

△荷化紫 △白茅 △下

△茨花 △馬薊 △下

△のさこ △馬 △下

△海金沙 △薑 △下

△金盞花 △棋檯花 △下

△黄精花 △三月大根 △下

△探挑栲 △梅の若葉 △下

△きのぬ △蓄菫 △下

三月菜

野△若菰

野△

△部

野△胡蔥

野△

△櫻のり

野△茶摘

△かき茶

野△

月生類

此部ハ三月下月ヨリ

△呼子鳥

野△麥鶉

野△

△残る鶉

野△雲入鳥

野△

△鷓鴣

野△蛤ふら

野△

△櫻負

野△櫻鯛

野△

△若鮎

野△上り梁

野△

△青饅

野△

三必用

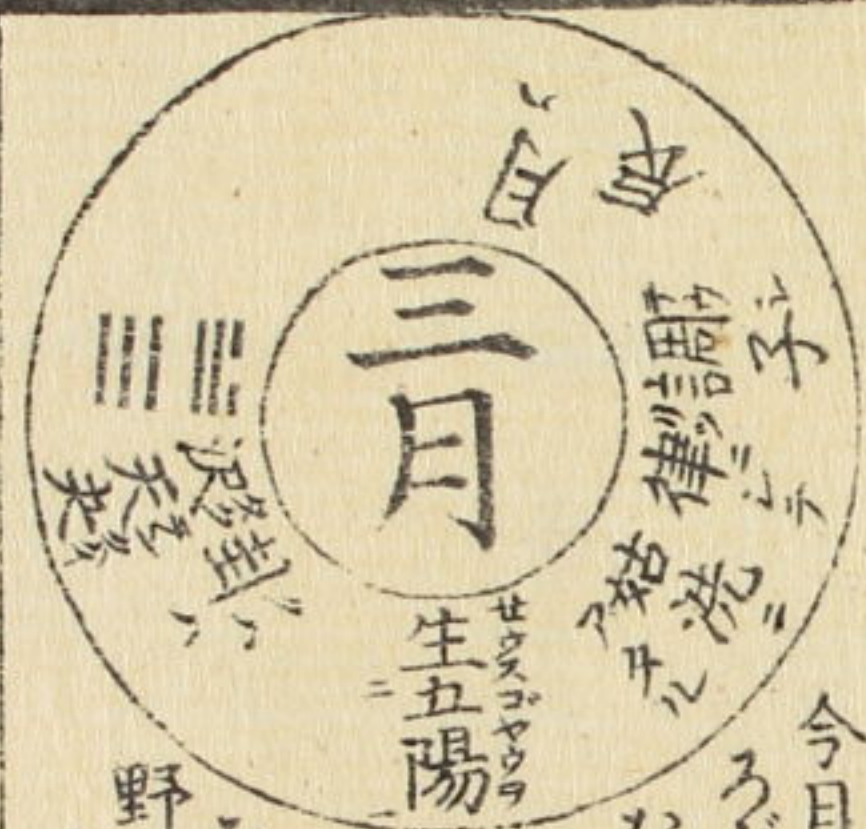
此部ハ風雨の占ハ破軍の

得ハ作事ノチヨリ料理献立ノ法食
物の好悪等其外品をあつむ九日の定まる
事ハ口の日令の部ニあり爰ハ日の定まる
る三月下月の要用のこと然あつむ

三月一日録

三月之部

△印ハ季ヲ持
物不用るもの



○五陽ハ三月の異名○沃天夫ハ五陽
長ク一陰消する意夫ハ去るの義ニ

異名

季春 中姑 春晚 櫻月
蠶月 暮春 殿春 五陽

鶯時 竹秋 春末 春杪 残春 春
婦 姑洗 弥生 花見月 櫻月

春惜 一み月 さつしな月
花津月 夢見月 あめつら月

異名註

○季春ハ三ノ名のたる
あり○中姑ハあひこ

もろく。襖月ハ上己のこころい
する月されはやくいハ蠶月

かづこ作。月しづ事。さうの暮
春へたるのふせの殿春のたるれま
んがりと云意の五陽の詩あり
鶯時いづをいとのなく時竹秋
たくなの時かれん。春末いん
るのをえり。春杪いえる乃
むらう。残春のころ多ひころ
といふころあり。春歸いえるが
るう。姑洗の姑の古あり洗を
あふた万物皆つたと去りて
あふしてかたは義あり。弥生
の春の陽氣よりて萌へ出る
草もこの月いづく生ひさうん
るればやあひ月といふと後暑
しとやよひといふふなり

歌秘藏 ささるさ月
古へるもまさはくゆるあり
ささるさ月にまやなりぬる

莫傳 花津月
花は月をさう後の名のあふ

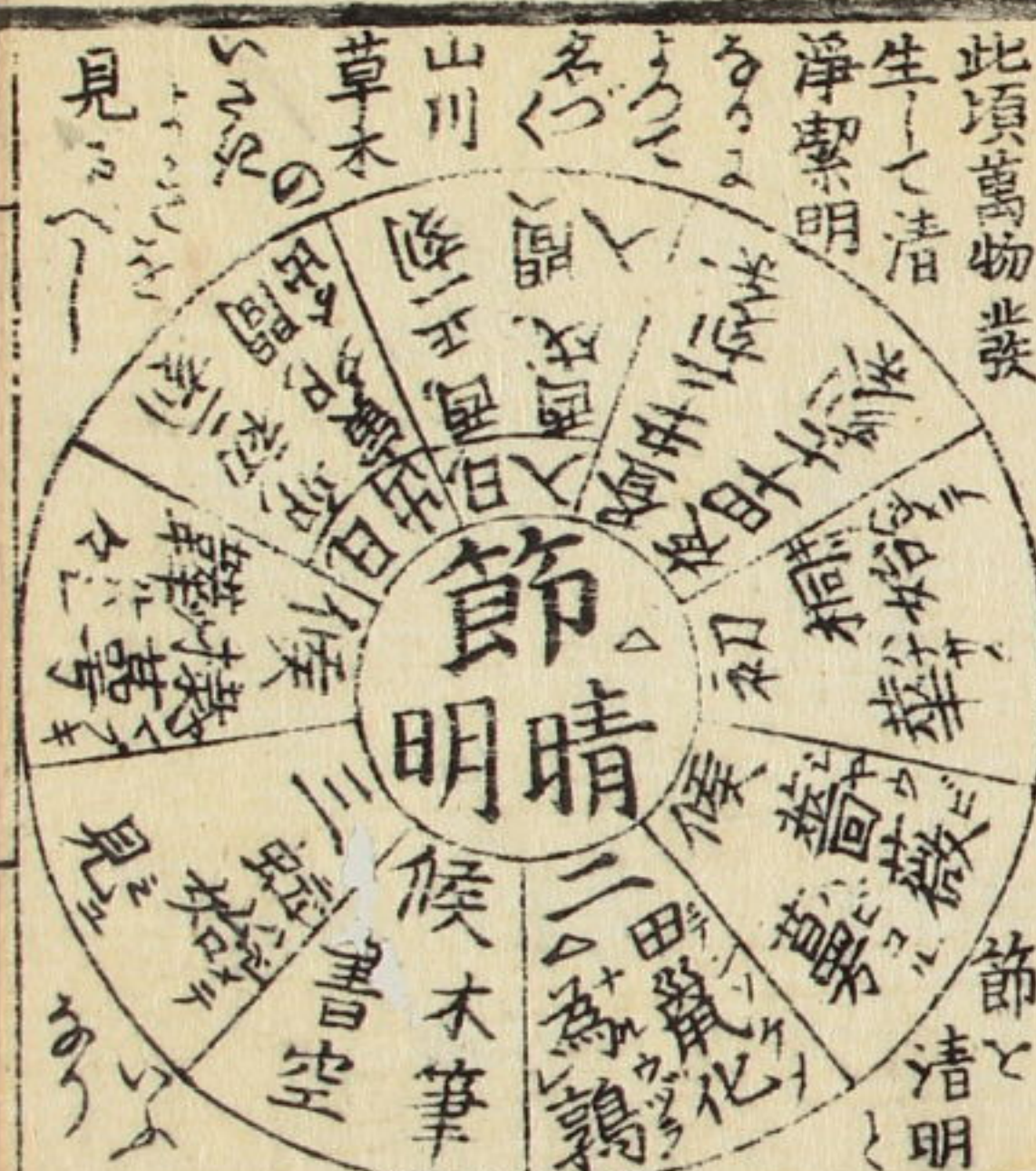
ひさしくまれの社われぬ

蔵王 ささるさ月
かべて今さかりとえて梅月
ささるさりさるは方のいれ

莫傳 夢見月
ささるさる勢のふ乃是月
嵐のさかれ雲のさるをせ

花見月
ささるさるをむひらのむ見月
まてあさるもあけがさぬん

節
立春。七十二候。草木七十二候
昼夜長短。日出等左記を

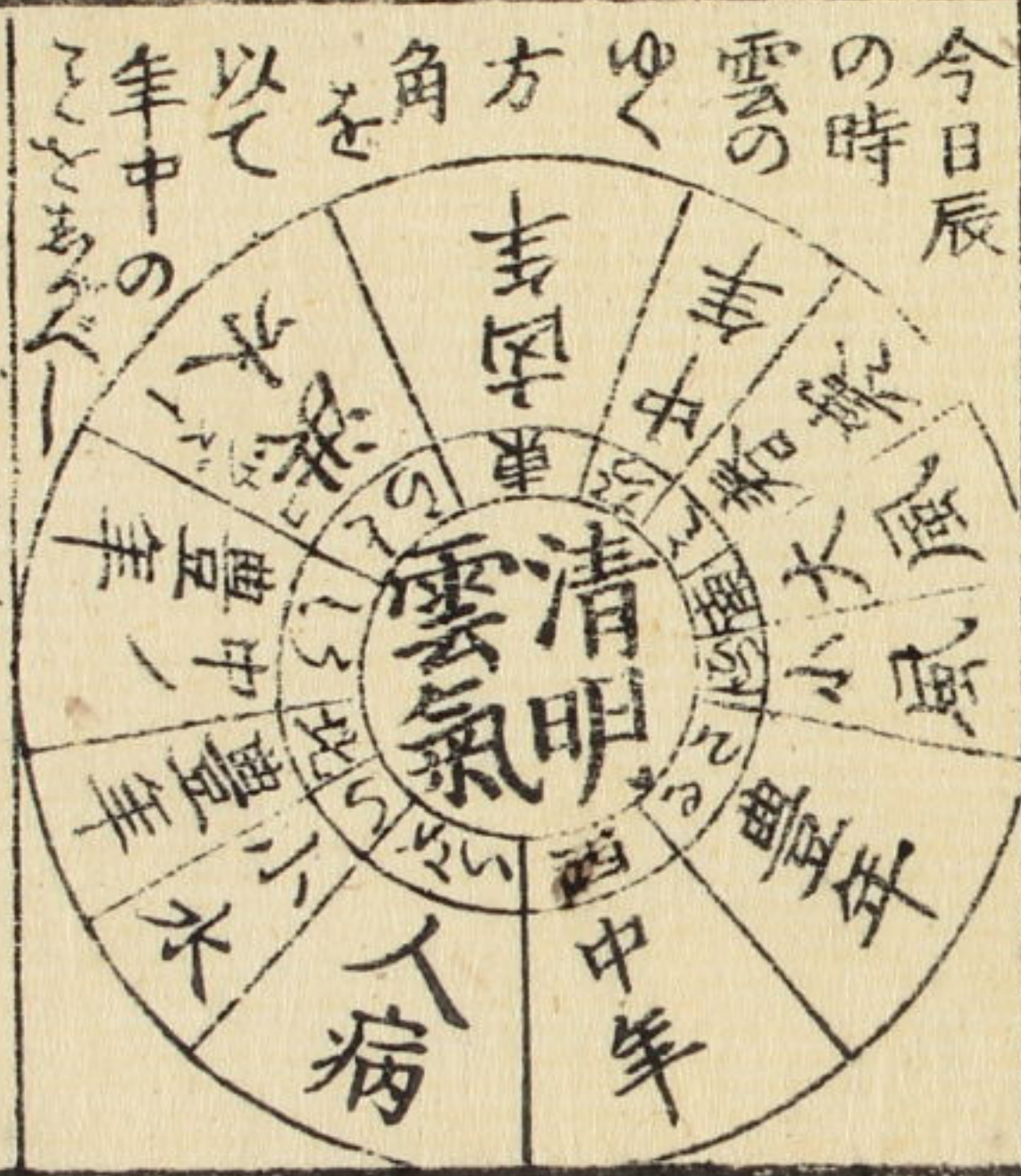


相華薔薇此ころくろくろ一書小
 玄鳥いさろくあり木筆いこが
 あり虹始て見ゆるはのころ事
 あり是寒氣ふらうて雨氣あり
 とつくと虹のいろと不成りく虹
 雨氣小日の映くころあり一書小
 鴻雁北よりあり北風
 ○此節より雪あり 節占候

雨少うておろよりまへ暗るまへ
 早蚕収る昼より後暗るまへ
 晩蚕収る○風東北より吹バ月
 未至まで米の價貴し東南
 より吹ハ中旬米價貴しと
 ども月末に至ては賤し西南
 吹バ月末米價貴し西北
 かけハ中旬米價貴し

節花期知 年の寒暖小うると
 あり伏見北山横津 稲田其外
 凡此前後小く櫻も一重ある皆

今日辰
 の時
 雲の
 ゆく
 方
 角
 を
 以て
 年中の
 こころあり



清明日偶題 王世貞

穠李天桃名闘新 李ト桃ト選
 テ新ニニ名花ヲ争
 開ケリ 傷心眼底上墳人ハ庶
 人墓所ノ掃除ニ行ツ見レハ
 無常ヲ感ジテ心イタレキコト

生憎介子成寒食破損風光一
 日春 扇光ヲ穿過スユハ介子推
 推ヲアハレムナリ 介子推トイフ
 唐ノ忠臣ナリ

推ヲアハレムナリ 介子推トイフ
 唐ノ忠臣ナリ

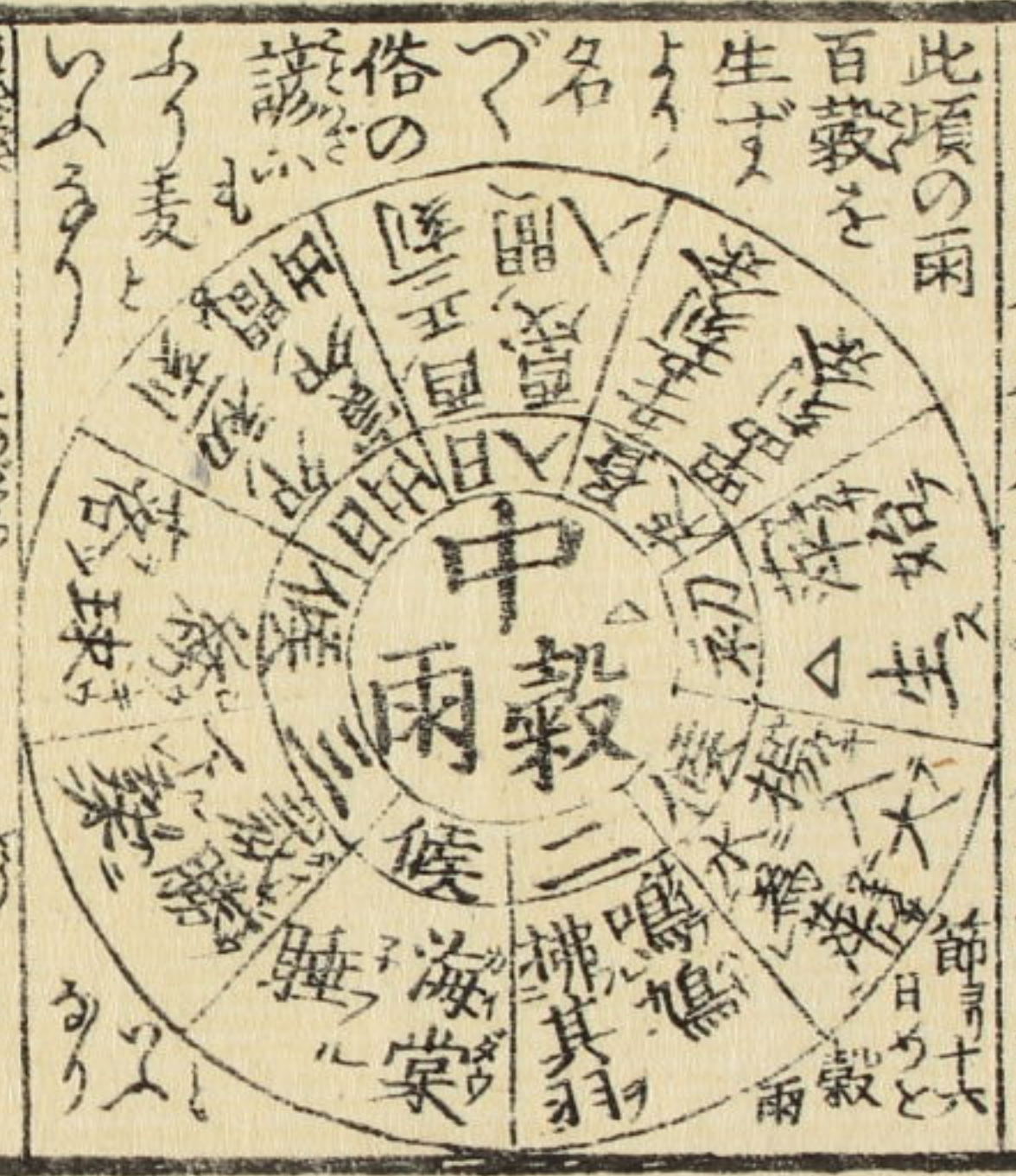
妙術 去蠹虫法 今夜子の刻樹木の上をくぐりて

をとりて狗の毛を煎じて泥土にかき屋内門戸の孔穴を塗る

まの蛇其外一切の虫家の内ふ今事か一月令廣義ふ出さる

中 七十二候。草木七十二候。日ノ出入。昼夜長短。左小あるす

此頃の雨 百穀を生ず



萍始生頃日池の中陽氣ヲ蒸きて草生と一書小菽とも芦

こもあけ揚萍成鳩鳴羽拂も春の陽候あり一書小第二候

牡丹華さくとあり裁勝とい百舌あり桑小下れ之綉球の櫻桃あり

妙術 治熱病法 今日茶を炒て蔵め置き此

茶と煎て香めバ痰嗽百病一切の熱病を治るなり

花盛期 吉野山あても山上を遅く山下は早いと

へん中より七八日前と盛る京智恩院根津鷺尾山とて八重

九重の名木ハ此頃より御室鞍馬八幡等ハ今五七日も遅

八十八夜 立春の節より八十八日めぬいふあり

俗説ハ名残の霜くいふ凡春の氣終る夏は火氣に变化する

るの節さしが霜も此頃よりあつさるといふさるべし此と

霜降をば草木のころを
損をかひて其をせむをこへ

○綿をまうく此前後より八十八
夜の前者四月五日までまうくあり

土用 一年四季の土用を合せて
一季七十二日として三百

六十日あり土用の中央にて信守り
四季春木夏火秋金冬水の間

配七十八日三分であり十九日の
事あるは刻數にていやそり十

八日三分あり三月節小入てより
十三日め土用の入り夏秋冬同是

土用天氣 土用の内西北より
開き一日の中雨を

然まども北風吹出せば晴る南
風いきて雨あり○雨ふりつぐ

とれも北風あき出せば雨暗ると
又とれ三四日の中又雨あり

やと東風とそり時ハ暗
はぐく土用の常の天氣と異く

日令 三月日の定より事
支の定よりなる記す

午 **菜子** 桑蠶の蚕今日蚕を
初て菜小付るを利

上 **京** 松尾明神御出七日の間
御旅して法楽の能あり

朔不成 **天氣** 晴天ハ五穀ハ
まうりか

あつひハ人病事多し○大風吹
ハ病多く草木虫多し○北風

吹て朝より未の時ハ
まで止む米價貴し

江戸 紅毛人如丹筆二
者外療登城日 **天氣**

今日雨あり **大坂** 天王寺經堂
の經供養の

刻三 **養生** 今日夫婦の
交をも守 **占**

候 今日風ハ梨樹小虫は守
雨ありハ梨の葉あり

蛙はより夜ふ入りあ 御燈と

北斗に奉る ひうの北山の高き峯に火を燃

て北辰を供せりきけりともや今

御殿の北向小御座をききて

御拜あり 禁裏裏ふて

朝十番の聞雞ありしより今ふ

も是を行ひし事や

⑧ 雞も相撲ふ似たりわん坂の

上巳節 上の初儀より初の日

以後後世三日不定し奥の己

の日後の所記とへ重三

△ 曲水節 △ 流觴會

△ 執蘭 蘭と水上にうけて不浄と

桃花生玉澗 柳葉暗金溝

右の詩事文類聚上巳の処出ら

生花式正 桃・柳・やまぶき

桃・柳・やまぶき

とん等をひけり

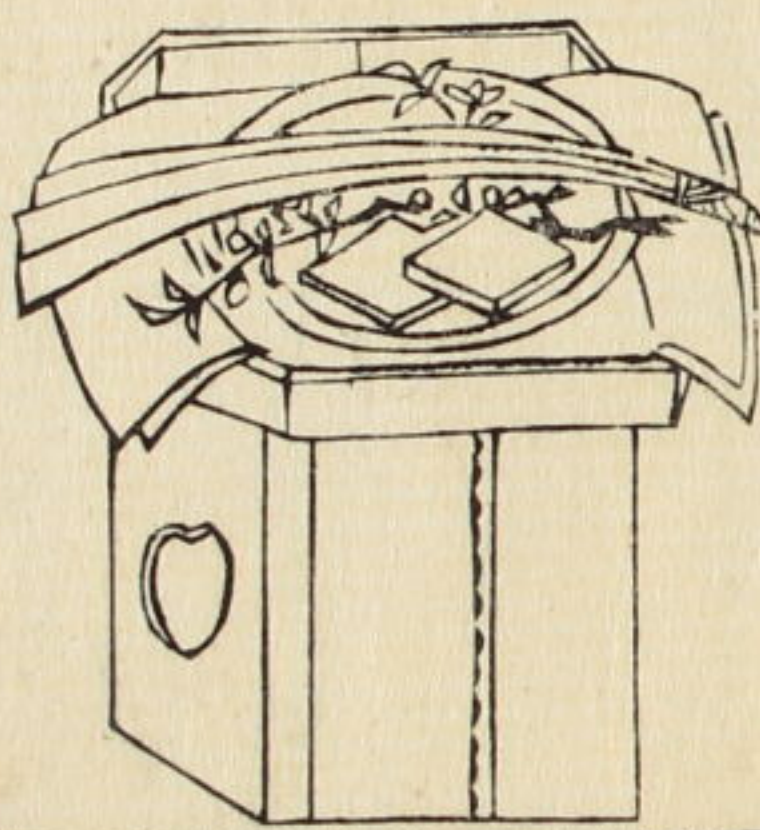
三月三日 三方

諸禮家 本式

夫木 為家

我よりあくまを花小碎ふり

新撰六帖 光俊



柳今日初と桃花酒今日

酒不和て香と月今廣義とあり

花を服まれを出ててまる

夫木 公朝

天の川一べの極や咲めらん

非孟拙のやき法あ麦林

狂飲のさるく年りのれを

草餅煎餅の汁と取餅と龍舌餅

と名づく今日食とる事唐ふも

草の餅を用る事あれ古へい

物をれば中世より用るともまる

狂かつもあるを繼ぐぬの

狂かつもあるを繼ぐぬの

己の日後 水辺あて後して疾

是周の世ふらししを魏の時

己の日と用る事は當月辰の月

帝元年上己日清苑は御幸あり

須磨御

光源氏須磨の浦小左近の時

陰陽師は仰せて御後しま

三月一日

つゝ舟小入がごとけり
てみきし事あり
曲水

け宴 盃を流してをる
盃を流してをる
曲水の

の事多く出され唐も久し
きころるべし川の辺り小道
して流水小杯を浮べ其杯の我
が前と過ぎり先に詩と作りて後
杯ととり吞し事本朝み
顕宗帝の御宇より始まれり

〔詩〕 草庵 頃阿

石室初花の志をまて志ぞ
きごころのそにかれもあがさけ

夫木 後京極摂政

ちる花をさる人の園居はえと
浪る不絶なる春乃さづき

同 定家

かゝ人のあそびつゝあそびの
浪よあそびたふれもあそび

〔詞〕 ささぎをさる人の園居はえと
うたがす。川あはれはえはえとあそび

〔俳〕 曲水のわのさちがひの春流は其角

〔狂〕 花をさ下ゆくあはれさづき

うらみあそび 枕 巴字水

のそら合の常樂菴

句ふむさひ三月三日小限ま

曲水の形巴の字なり 朗詠ふも

出さる〇水成巴字初三日。三

月三日と初三といふ源起周年

後幾霜。周年といわゆる年月

といふ周の世ふをへて作ま

周公且洛邑ふて曲水の宴と始

めりしやうのくわし年月とをうと

〔詩〕 夫木 定家

かさをがく巴の字れあはれとて
そらにのそら合の常樂菴

〔詩〕 曲水之詞 王昌齡

雨歇楊林東渡頭 永和三日盃

輕舟 春雨コロヨク晴テ舟ヲ
コシテ東ノワタリニ越ムク
故人家在桃花岸 直到門前溪

水流今日志ノ行サキノ友交子ノ家
八桃花ノ咲ク岸バタニアリテ
川ノ水ガスクニ門前ニテ流テス所ナルゾ

詩 曲水五字對句 同上

畫筭搖浦淑 故事修春楔

春服滿汀洲 新宮展豫遊

詩 同七字對句 詩礎

烟閑蘭葉香風起 白鳥飛

岸夾桃花錦浪生 引飛觴

永和春色千年在 舞鳳樓

曲水鄉心万里餘 泛觴遲

雜遊 △雜祭△雜飾△立雜△敏
達天皇二年小始る。雜の

後の貝より身体を母子離にて
撫て水小流し凶事を除く事

○又離の鳥の子の惣名へあ
らしむゆ名をさる小女是と再

内と守るの教より昔に常はるの
事あり近代ハ三日小限る即季と指

非 いじりや餅小餅して小孟其角
多きやの餅の飯 移竹

狂 餅をえとむきつゝの事のこと
わつとあふの世流みそあつける白柳

詩 上己看花 明 楊基

東湖東畔柳絲長 滿苑飛花乱

夕陽 湖水ノ川畔ニ柳ノ條長
夕陽クシナダレ夕日ニハ花ナリ

乱ル、ケ 何處袂除兒女散過來

流水貯金香 弥生ノ被ヘ車ス
ムンテナリぐニ家ニカヘルトホリ

スグル水ニテガ衣裳ノトメ木
ニホヒウツリテカホレリ

又油花トノ故事ニモトレリ

詩 同 劉得仁

未敢分明賞物華 十年如見夢

中花 世間ナニニ節句ヤ花鳥
ヲ樂ムトモナク十年バカリ

ハウレイ多クウカノト 遊人過盡
花ヲミルモユメノコトニ
衡門掩獨自凭欄到日斜
風景

シ流鶯ノタメニ遊ビ来ル人スギ去リツ
キテワガ家ノカタオリ戸モ戸ガシテ
尺ヒトリランニヨリ彼レコトオモヒ
メグラスウキニホヘズ日モラタムクナリ

汐干 三日六海の潮茶かきとろろ
江戶芝浦品川。大坂住吉浦

○泉州堺浦。花現玉取。其外諸國汐
干の處多し。爰小て畧シ

夫木 家隆

あらどい汐干はまも何さらん
後の雨免みわろく彼を

夫木 師光

修勢の浦はなをれは詩をて
郊乃乃つと小貝やひらりん

詞 霞はうろく春の浪を袖風
いささる。沖かけて。からさる。心外
の浪や久袖。貝ひひふ。まひのぬ

俳 鐘教也抄 櫻さくら江戶汐干 貫十

二月廿日三の後多井汐干小康昔
親やむ比目とさす汐干小其爾
崎小ぼまると汐の移れうを移竹
移してとてい見跡を汐干小十磨
狂信りやひんぬるも汐干浮
海かたれゆく私とさるる常樂菴

三日妙術 薛譜虫法 今日薺の花を竈乃上又いそ

糸の居間小まけをむし蟻とさ
ぐく辟するあり。○苦棟の花う

ちり花さくり葉はてもとて
臥房の下にあり。登あことと

碎るへ。○今日又かつちの辰の目
に薺の花桐の花芥菜と衣服
の中へ入とけむしをい事さ

面の光沢を出す法 今日桃の花と

採り収め七月七日に雞の血を取
る二味和し勻へて毎夜うねいぬ

る。三四日小至て顔色ほやと出
老うるもさかく見ゆなり

伏レ賀上巳之文 真字ハ尺牘多ク

一筆破上仕ハ先ハ以テ法勇

慶修ニ尺一一 替レ券 平

勝ニ次ニ在ニ在ニ 亦レ珍ニ重ニ以

安ニ可レ嘉ニ 可レ喜ニ

修ニ輕ニ傲ニ之ニ玉ニ垂ニ之ニ均ニ光

戲ニ

海魚ニ二種ニ多ニ之ニ仕ニ以ニ聊ニ

供ニ雙ニ魚ニ

上巳ニ之ニ淨ニ仕ニ依ニ之ニ上ニ衣

祝ニ上ニ除ニ之ニ辰

式斗ニ之ニ度ニ之ニ燈ニ儀ニ之ニ云

幸ニ標ニ入ニ之ニ焉

尺牘 上中下 辭 辭

供ニ雙ニ魚ニ ④ 獻ニ海ニ鱗ニ ④ 送ニ溪ニ魚ニ上

除ニ之ニ辰 ④ 上ニ巳ニ佳ニ日ニ ④ 被ニ袂ニ令ニ辰

蘭亭會日 幸標入 ④ 伏ニ之ニ盃

納ニ勿ニ誅ニ其ニ不ニ腆

三日 踏青鞋履 唐士ノ俗 士女子野

遊スル 祈社 女巫水臨ニテ被シテ邪病ヲ除キ

福ヲ祈ル風 被灑 武帝位 二即テ 俗通ニアリ

数年子ナシ平陽王良家ノ子 ヲ十人余リ美麗ニシタテ、

カ、ヘヲキ武帝ノ霸水ノ上ニ 被シ玉フ飯リニ立ヨリ玉フヤウ

ニセシト漢書ニアリ其外被灑 金堤石壇ナド皆今日被せシ故

多シ 蘭亭 晋ノ王羲之會 替山ニテ詩人文

入ヲ集メテ酒宴ヲ催シ被ヲ ナセシトアリ蘭亭ハ亭ノ名ニ

ユクワホク 唐土ニテ婦女被ノ 花ヲ油ニ点ジテ祀

ヲナシソレヲ水中ニ蘸シテミルニ若 龍鳳花卉ノ狀ヲセバ吉ヲ得ルトス

近江

△石山祭○古采の朔日より三日まで日々種々の式法あり

今湖日新宮大明神近津尾八幡宮兩神與新宮の拜殿より出御ありて神樂あり三日兩神與三十八所

明神の拜殿より渡御ありて衆徒集りて法樂の奉幣あり御酒

と奉りて後神輿還幸ありあり

粟津祭

江洲鳥居川にて大友皇子の灵を祭る今絶う

京

○加茂神事三月三日あり ○洛北靜原祭右小同

土佐海硯石

土佐國の海辺にあり三月三日干

浮る海中の石と取りありこれを硯小作を以て佳あり

四排

古里ひさそで(ウツリ)當時にあり日(ウツリ)井魚(ウツリ)出替(ウツリ)今日

と用也古采の二月二日(ウツリ)非(ウツリ)出替(ウツリ)や(ウツリ)お(ウツリ)さ(ウツリ)ま(ウツリ)ら(ウツリ)あ(ウツリ)る(ウツリ)嵐(ウツリ)雪

五 養生

今日まべて物の血を見ること代いむ

京

○建仁寺開山忌○高野村祭 △修学寺赤山明神まつり

△乘寺祭まつる神三社あり一八大天王ニ比良貴天皇ニスス天皇

六 妙術

今日桃花と栞てたけいへるふは(ウツリ)今日井華水

以て沐浴と(ウツリ)厄病(ウツリ)の(ウツリ)が(ウツリ)く(ウツリ)え(ウツリ)京(ウツリ)社(ウツリ)能(ウツリ)あり

七 日

今日齋(ウツリ)戒沐浴(ウツリ)天氣(ウツリ)今日南風あり(ウツリ)色(ウツリ)五穀(ウツリ)忌

夏旱(ウツリ)北風(ウツリ)雨(ウツリ)之(ウツリ)豊年(ウツリ)大和(ウツリ)茶師寺家勝会(ウツリ)勝王経(ウツリ)講(ウツリ)事(ウツリ)あり

信濃

今日鹿の頭七十五と供す氏人の(ウツリ)内(ウツリ)方(ウツリ)より(ウツリ)く(ウツリ)る(ウツリ)事(ウツリ)あり

集(ウツリ)ま(ウツリ)る(ウツリ)車(ウツリ)増(ウツリ)減(ウツリ)な(ウツリ)し(ウツリ)右(ウツリ)の内(ウツリ)小(ウツリ)兩(ウツリ)耳(ウツリ)を(ウツリ)た(ウツリ)け(ウツリ)り(ウツリ)ら(ウツリ)ま(ウツリ)り(ウツリ)て(ウツリ)ら(ウツリ)あ(ウツリ)り(ウツリ)日(ウツリ)八

京

泉涌寺(ウツリ)開山忌(ウツリ)大坂(ウツリ)住吉大嘗會(ウツリ)天王

寺より樂人十六人來りて舞樂を奏し、伶人の舞あり

中 名清水臨時祭。男山八幡宮。小石中の午日之南祭と云名高

と祭之是將門之亡し乱と鎮め給ひ御報賽ふて天慶五年より始り

上総 中山法華寺千九不成部執行十七日返日就日

京 大坂 住吉小水尾 嘗會

祭 丹波國東田郡愛宕山十清和天皇の山陵と祭之日 京

高尾法 讚岐 金毘羅會式あり 華會 或ハ市といふ四日よ

十二日まて 中 近江 三尾明 神祭 日 申

京 稻荷明神御出御旅所西九條東寺建立の時老翁とあり

稻荷と荷ひて現 弘法大師則芝守長者と云者の家と借て入奉り其

日 今月中午之廿日と経て四月上卯日 鎮座成り此例とて今日迎奉ると

十一日 京 安樂花。西加茂上野川上村 右の三郷より傘鉾及び離

子物といふと今宮の社に群集と ありやとつひとあそびやす是ハ

高雄ふて法華會やすうふはとあ 終るといふとかくるはいとあり

哥るはふありけりはとありふ なるはとありけりはとありふ

非 山姥もやといふ 大和 吉野會式 子守勝手

而明神の神樂本業 二十日 京 永観堂 善

出御仁王経修行と 導忌。悟真光明善道大師の階の 世ふ生唐の永隆二年三月十四日寂

東禪林寺 永観堂又ハ智恩院 寺中善導院等ふて修行す 今日止

近江 戲山天台礼并講 日吉 八王寺并殿ふて行ハ今日止

三月 日吉 八王寺并殿ふて行ハ今日止

日三十 京 長講堂後白河法皇御忌
○大佛蓮聖院開帳燈三千三

日四十 鎮花祭 三輪・狹井・二神
△壬生寺大念佛十四日より廿四

京 善導大師御忌修行あり
△壬生寺大念佛十四日より廿四

日まで本堂の前ぞおぼろ念佛を
はらめもくくの狂言をつくす

非 声のてんるうき念仏 滝列
△嵯峨十本念佛。皆疫殺の遺意

日五十 京 祇園一切経會 拾芥抄出
聖護院の森熊野権現祭

勸學會 康保年
中大内記保胤文道先達の学徒に進

りて始りる勸學院三糸の北雀の森其
跡へ地世四糸大宮の西ふりつとあり

江戸 隅田川木母寺大念佛
梅若祭吉田少將の男入小

欺きて東海小趣と病ふらと死を
塚小柳植今に至迄大念佛會を以て居る

○浅草第六天祭 ○下谷
稻荷祭 ○浅草念佛院中

將姫法會 ○芝鹿島御穂
而社祭礼隔年小礼行とる

諸方 ○藝州巖島會 十五日
△江州比良祭 昔山門領あり故

日六十 黄姑侵種 日
天氣 西南の風 早

主る風烈しけきハ弥早強
唐土の人は是の依て錢百文を

軒の下にけけて風とくくあり
風との錢をうとくはとくあり

早とくして其用意をさひかり
早とくして其用意をさひかり

忌旅行 今日遠方へ行事を
一うき不慮の難いなり

無縁経修行 昨十五日より廿
一月迄横州中寺

親音野崎觀音等參詣 十八日
觀音懺法修行せしむ故なり

不成 江戸 △淺草むん
就日 江戸 ざらりの神事

祭礼あり年の義より
神輿本堂に遷座法會あり

江戸 淺草三社権現祭
丑卯巳未酉戌の

年行りあり。池上本門寺千
部修行 今日より廿七日まで

大坂 淨光寺觀音懺法
大龍寺觀音會 摩尼山

人丸御影供 明石にて修行せ

昔は毎月今日内裏の和哥所小の哥
の御會有今も和哥好合會あり

九京 嗟哉歡迎御身拭の如來の告
父の牛の生と敷と佛果と得ん

為如來と拭衣と牛のくも獲り是
より毎年如來と拭衣と白布と奉る人後

諸國弘法大師御影供

大師入定の忌日ふして紀州高野
山の勿論京東寺高雄ととめ

因々一宗の寺院は法事あり
△高尾女詣常々此山女禁制あり

今日よりゆりありて參詣
群集とる江戸とて川寄大

師河原參 大坂 住吉たが
詣甚多し かの御影

天王寺大字堂 近江 礼拜
法事音樂有 日四 講十

二月十三日修行廿四日廿五日と新礼
拜講云叡山大衆の橋奢と敷て

山王大師昇天志ありん託宣有て
木黄の變ず大衆驚き法華八講を

修行し神と 不成 山城 二の瀬
慰養奉るあり 就日 山の神祭

大和 南都般若 養生 房事と
寺文殊會 飛べり

今日沐浴し七身を清くし神
氣さるるに成て諸病を患へど

八日 近江 比叡山とて山王祭
用ゆる榊とらうり

晦日 爐閣 又炉塞ともかけり茶
人の炉とぬさぐくをえ

茶湯の法十月より今月晦日限
りて四月朔日より風炉あり

詞 友とらうり。春の名病。

京 千本引振寺念佛。堂前
普賢像の櫻あり此花乃

開くと期して念佛と執行と
此花凡立春より七十五日頃ふ咲と

月令 此部ふの日の定まらざ
る三月三月の更と記す

順峯入 春大峯山上とら
順の峯せり人こと

本山より聖護院宮御門主天
台宗より當山といひ醍醐三室

院御門主真言宗より役行者三
十四歳の春葛城を経て熊野を

經て大峯と踏分けぬいと順の
峯入のよりめりて本山の御旧

格より春毎小御代参順の峯
入有と順へ本山より秋を逆

峯といへ本山當山といへぬと
けたまふ事七月の處外記す

能入 花雷 花之縁 俗説

小三月と婚姻ふ忌ひくつ。或説
花の淵かりとらうり岸をく小多

あるといひ。詩經ふ桃之夭々其葉
蓁々之子于歸。桃の花咲く頃

女子と嫁入と事へ爰と以て見
る。然り婚礼ふ忌むといひ非なるべし

小弓 昔内裏ふて此事あり
地下に春の遊ひとす

寄杖結の穂ふとぬ世のうれふ
まのふとひぬらうこゆとなく慈鎮

三月月令

三月月令

衣服之正式 綿入と着と袴の柳色多

時衣 △櫻衣 表白裏赤 △櫻重 表赤裏白 △山ふさ 表赤裏白

△裏山吹 表赤裏白 △衣 表赤裏白

⑤ 續後拾遺 為明

女衣服 白ふさと白ちりめん

川うづまきと暮行るるもの

やう金銀くを以てまがきたる

と間着のひんごひんごめん

の類さうらひさる又も色

はく花のもまうけうちうひも

りちゆるをやういあうと地

登ふを上着ふとぐー 是の

上つこの式を四民是ふあへ

寒食 冬至より百五日の清

明の節前二日といふ

此日より清明ふり唐土より

先祖の墓所を掃除して祭を

各と事今日と十月朔日あり

草木初て生ずる時を以てかろ志

む人墓所へ行て拜掃と

非を食ふいひるはを掃と 琴麻

を食ふ炭の付る猫の殻 積

詩 寒食之詞 韓雄

春城無處不飛花 城下處々春花チリトハリ

寒食東風柳柳斜 春風柳ノ枝ヲ吹フビイテ

景色 今日漢

日暮漢宮傳蠟燭 朝ニハ

火アラタメテ 諸臣ニ下シ興へ

賜ルナリ日ノクレカタニ新火ヲ

点シテ 禁煙散入五侯家 高位

ノ貴人カタ火ヲ賜テ

オノクヤシキヘカヘル

詩 全 韋莊

滿街楊柳綠絲煙 街ノヤナギ絲ナル絲ヲ見カ

如ク春ガスミウツ エガキ 畫出清明二

リテウルハシキニ

月天 清明ノ天氣イサキヨ 是

隔簾花樹動 簾ノ内ヨリ春風

影色ヨシ 女郎擽乱送鞦韆 禁

ノ女中鞦韆ノ繩ヲ引キ

ノハテ今日ハタハラフツブ

寒食 唐土ノ政年

故事 中ノ火ヲ改ル

ニ榆柳ノ火ヲ用ユ春ハ木夏ハ

火ニ属スル故木生火ノ義ヲ以

今日改ルナリ 論語ニ燧ヲ

キツテ火ヲ改ムトアリ

子推 春秋ノ時晋ノ文公ニ

仕ヘシ介子推トイフ

賢人ノ燒矢レ日ナレバト

テ三日カ間火ヲタツナリ

食 秦ノ人ハ寒食ト云ハズ熟

食ト呼ブ火ヲ用ヒズレテ

ヨク食物ヲ熟スルトノ義ナリ

又齊ノ人ハ冷節ト呼ビ禁煙

トモイ スモノカコナクカ 杏粥束粥青精

フナリ 青飢飯。桐楊ノ葉ヲトツテ

飯 飯ヲツムレバ青ク光リアリ

コレヲ食ヘバ陽

氣ヲタスクトヘ

鞦韆戲 半

戲 彩ル繩ヲ木ニカケ架ヲタ

テ、其上ニ坐シ立テ其繩ヲ引

ウゴカシ

傳燈 漢ノ世ノ政

キヨメテ日暮ニ燭燭ニ新火

ヲ点ジテ近臣等ニ賜フコト

アリコレ寵恩

ノ厚キナリ 唐ノ

年中天下ノ士庶ニ勅シテ先

祖ノ丘墓ヲ掃キキヨメテ祭

ルベシトナリツレヨリ此日ニハ

貴賤老弱群集ストイヘリ

時令 此部ノ三月の時侯

小ツル事トイフ

暮春

三月廿日頃より末と云
三月晦日といひても不苦

連吹さらば海もや春の風 宗祇
初まよやむとてお守り御川 全

非 初まよはれぬとてさやゆ弘永
やまよとていれぬとてさやゆ弘永

狂 春の風ゆるり春のせん 宗の
あふふとて遊ひゆくやう 重故

哥 嘉元百首 為実
ふさふさある二月のくま乃あはれ
むとてさやゆ弘永

千五首番哥合 寂蓮
あづまにやまの初へを今春より
あはれもはせよとていれぬとて

詞 初まよはれぬとてさやゆ弘永
今くく名跡をよ
なのみとて 霞 今くく名跡をよ

春 花らうも砂もぬ 初まよはれぬとて
お集り入る 春風をよめく 名を定

小入 花をよめく 入相 春の名跡 名跡
とてさやゆ弘永

とてさやゆ弘永

とてさやゆ弘永

とてさやゆ弘永

とてさやゆ弘永

とてさやゆ弘永

とてさやゆ弘永

とてさやゆ弘永

とてさやゆ弘永

とてさやゆ弘永

とてさやゆ弘永

とてさやゆ弘永

とてさやゆ弘永

とてさやゆ弘永

とてさやゆ弘永

君カヘリ玉ヲヲ
送別スルナリ
到来面谷愁中

月歸太磻溪夢裏山
面谷磻溪
八道中ノ山

川ヲ云旅ノモノウ
サヲ思ヒヤラルルハ
簾前春色應

須惜世上浮名好是間
春氣色

名聞ハム々ナリ
西望鄉関腸欲

斷對君衫袖淚痕斑
君ヲ送別

郷ノコヒシク君ノワカレニ衫袖モナ
三ダニホリアハナルナリ

詩暮春五字對句
同上

啼鳥春將盡
誰知心裏恨

落花雨未晴
已過夢中春

詩全七字對句
詩礎

如流春色催詩賦
坐情春

欲盡花香滿衣巾
鳥空啼

ケイレイヒキウキタツクモ
村嶺樟来雲似墨愁暮天
洞庭春盡水如天
蝶怨風

詩暮春之詞
王維

廣武城邊逢暮春
汶陽歸客淚沾巾

鳥揚柳青青
渡水人暮春ノ景

惜春
野宮大臣

春湊
春のあけ
意人字ハ

三月
三月

三月
三月

三月
三月

三月
三月

三月
三月

三月
三月

三月
三月

三月
三月

三月
三月

三月
三月

三月
三月

三月
三月

三月
三月

三月
三月

あつたふももあつた

新古今

寂蓮

三月盡 三月晦日と云ふ

三月盡

一日の夜を

哥 奇苑抄

行尊

夫木 唯残半日春 千里

一年の暮と云ふもあつた

日 西処春光同日盡 千里

春の暮の暮もあつた

詞 暮の暮へ夕暮の暮はあつた

花の暮の暮もあつた

夕暮の暮もあつた

連 夕暮の暮もあつた

非 雨の暮もあつた

詩 三月盡之詞 唐 韓偓

樹頭初日照 西蔭樹底落花夜

雨沾 朝日ハ花ニワツロコニキヲテ

後堂欄檻見垂簾 外ノ戸ヲアケ

来ル人ノアルニヨリ 女中ノ腰ヲ

戸風斜倚 榆英堆墻 水平淹

悵在 季年三月病懨々 今ヤ三

毛物ワビシク心ホリキハ三年ヤミツ

愈サルゾモノイトハレキニ

三十一

三十一

今孤楚

小苑鶯歌散長門蝶舞多鶯モナキヤ

蝶ノトビカフ時ハ春ステニ暮ルニ至リ長門宮モ物サビレキゾ

眼看春又去翠鞦不曾過久レク行幸

ナク御クルトホリスグルモナク今年ノ春モアダニクレケドモ行幸

ノサタモユク君ノメグミヲウケヌヲナゲキタルナリ

詩全

賈島

三月正當三十日風光別我苦

吟身三月晦日ナレバ今夜バカ共

君今夜不須眠未到曉鐘猶是

春余リ名残ヲシケレバ今夜ハ眠レヲセシ晩鐘ニデハ未ダ春ナク

忘去霜トモハワレ霜△名残の霜△立春の節より八十八夜

四月節のあつとまふれ霜と云

草木

此部ハ三月一ヶ月の草木を集めんと

花 古昔ハ梅小定る一枝開天下皆春をく詩は用とも梅の

花ハ〇中世ハ梅の〇花と

ハ〇一説ハ和奇ハ花と

櫻 夢見草△あぢ草△吉野草

中華にて此花を櫻木と

或ハ櫻桃を以てさくハあぢ草

ゆす梅より朝鮮ハ此花を

多くあると見てハ聘使の朝鮮

人等甚だこれを愛慕セリ海棠の異類ハしてハ望玉のハ

その花の美き事本朝の外に
 ありなきと見へり此事唐人
 にも能く知る宋景濂が詩
 あり末に載と

○夫木 野外花 家隆

梅うらむぢりあげえりたるの
 母のうのかいぬむもつらぬ

同 庭一櫻 仲正

かろくや約もかぎぬちの
 危もせぬさくういさくうか

詞白文 嘆らる。梅ふ。○雲

雨花と雲の 鶯 本づらん

鳥 暮の林の 胡蝶

雁を足と 暁 指さす月

世 都 都

林 山 山 山

心 山 山

老 神 露

夜 夜 夜

夜 夜 夜

夜 夜 夜

夜 夜 夜

夜 夜 夜

夜 夜 夜

夜 夜 夜

夜 夜 夜

夜 夜 夜

夜 夜 夜

夜 夜 夜

夜 夜 夜

夜 夜 夜

夜 夜 夜

夜 夜 夜

夜 夜 夜

夜 夜 夜

夜 夜 夜

夜 夜 夜

夜 夜 夜

夜 夜 夜

夜 夜 夜

夜 夜 夜

夜 夜 夜

夜 夜 夜

夜 夜 夜

夜 夜 夜

○前ふりてとく花と櫻と同
 様の事ふれども和哥は花の
 題は櫻と詠とてしるはさ
 櫻の題はさくうとよむ事し

○連俳は子細ありて櫻乃
 句は花の句ふありさるに附
 句は花よさくうと付す事
 ありけり櫻の句小花ありて
 付さるに但し櫻と以て正花と
 する事格外の傳あり

○哥連俳句法

○前ふりてとく花と櫻と同

様の事ふれども和哥は花の

題は櫻と詠とてしるはさ

櫻の題はさくうとよむ事し

○連俳は子細ありて櫻乃

句は花の句ふありさるに附

句は花よさくうと付す事

ありけり櫻の句小花ありて

付さるに但し櫻と以て正花と

する事格外の傳あり

○哥連俳句法

○前ふりてとく花と櫻と同

様の事ふれども和哥は花の

題は櫻と詠とてしるはさ

櫻の題はさくうとよむ事し

○連俳は子細ありて櫻乃

句は花の句ふありさるに附

句は花よさくうと付す事

ありけり櫻の句小花ありて

付さるに但し櫻と以て正花と

する事格外の傳あり

○哥連俳句法

○前ふりてとく花と櫻と同

様の事ふれども和哥は花の

題は櫻と詠とてしるはさ

櫻の題はさくうとよむ事し

○連俳は子細ありて櫻乃

句は花の句ふありさるに附

句は花よさくうと付す事

ありけり櫻の句小花ありて

付さるに但し櫻と以て正花と

する事格外の傳あり

○哥連俳句法

○前ふりてとく花と櫻と同

様の事ふれども和哥は花の

題は櫻と詠とてしるはさ

櫻の題はさくうとよむ事し

○非譜正花非正花大畧

○正花本植物春小成分三句去り

△花の淵△花の浪△花の雪

△花吹雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

骸骨の上を踏こむ人々を思貫
月夜の涼や吸筒酒の反立圃
嬋娟も音塵みや花さうり移竹
秋芳の輝ふあらしど花盛宗阿
若那山世上の花のさうり淡々
狂西方は後去のまゝさうりへん
花さうりもさうりひがし山貞柳
人毎に櫻折あそびみあれて
あさし橋を杖ふしそはち長鬚子
さうりさうりさうりさうりさうり
以上ニテノの花
のかさうり行風

詩 櫻之詞 明 宋景濂

賞櫻日本盛於唐如被牡丹

兼海棠 日本ニテ櫻ヲ賞美
スル一唐モオヨバズ

其ハナハダシキ一牡丹ニ海棠
ヲソエタルガゴトシ唐ニハコトノ
サクラナキ故ナリ恐是趙昌所難畫

趙昌八画ノ上手ナドモ 春風絶
眞ノサクラヲ画クコトハズ
起雪吹香 白キサクラノ匂ヒ
思ヘルトナリ

詩 櫻五字對句 同上

名花経千歳 花白交梅樹

奇種開五方 枝垂對柳絲

詩 同七字對句 詩礎

芳野寒光千里雪 第一花

嵐山春色九重雲 白櫻開

花如解語迎人笑 因花醉

草不知名隨意生 山着色

詩 催花見文 眞字尺牘アリ

春山百花 満開

修家浄室之花只今今盛

吟客成群 不失時以

そ花人の市を賑く交々

共暢觴詠之懐

中石家内浄修 戸夜

同駕 怡々

るる立とて可為怡悦

尺牘 書啓上中下

春山 勝地勝境芳嶺 百花名花

催花 満開爛熳明眉 吟客遊子

騷客逸人 作群雲集奔凌絡繹

不失時 未辞枝 不後時 共暢云

侍吟筵 將野食同駕 催趣

行馳携手同歩 怡々欣躍歡趨

櫻田 吉野櫻の苗を植る夫

と櫻田といふ事

建保百首 光明峯寺

ふ凡の色吹おとさく田の 苗代水を花とせたり

山櫻 山中小多一花白色單

辨也早く開く品類多

晋 家集 定朝

るあましく多かりきばやも桜

花の志のくはそはらわら

非 素のいはいみ種とみ極其角

家櫻 人家小ある櫻といふ

一面は咲つてはる

の月夜家花今の家桜也 満水

庭櫻 新撰六帖 知家

庭のさくらさくらさくら

庭櫻 庭のさくらさくらさくら

庭櫻 庭のさくらさくらさくら

庭櫻 庭のさくらさくらさくら

庭櫻 庭のさくらさくらさくら

庭櫻 庭のさくらさくらさくら

庭櫻 庭のさくらさくらさくら

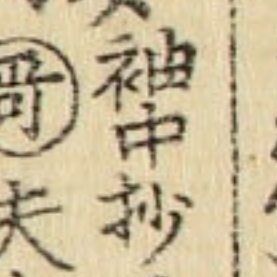
庭櫻 庭のさくらさくらさくら

哥 文應百首 為家


うづらうづら神のまゝの八重桜
まの日のけあふらひはた

犬櫻  木葉常の櫻は同
小花穂とさす山多

狂 仍多て本れ下陰い盗人の
用心もとれた大梅うら 貞宿

渦櫻  神中抄云唐鞆の雲珠似
哥 夫木 定家

そやけいさのさけさうのさう
くさのふよさけるさう

棒櫻  花棒茶色之故少く
又別かをば本あり

是ハ檜物ニ多く用る日のあり
哥 新六帖 為家


棒らまの里のかを梅
さふのさのさふさう

遅櫻  色少紅く諸花不
後青葉隠れ

味 四月新樹ふくま合と事あり
草菴 頓阿


おれりもはれををいそあひどい
おれりて咲る花と見すや

連 ちれおふとをてさうは梅
非 かくわくをてもふ遅さう異枝

烏帽子櫻  非 花がめには五鳥
帽子さうふ如水

小櫻  花身色密ありて
咲鏡の小櫻威と


よ物此花乃色ふかざうとく
非 小梅の花咲あや具足親車寛

伊勢櫻  花濃紫色小
赤一花瓣の

中の元白しと名はうて説多
非 佐保妃と姉系まへせ梅 重以

普賢象櫻  花千瓣
淡色と

帯の花中二の細葉出象鼻のじ
非 鼻は似てさうもふかかん象鼻重

塩竈櫻  在 塩竈の海濱あり
梅初さけはれせん三番

緋櫻 小輪にて莖長くは蒼甚
赤一 新撰六帖 光俊

夕附日掃ふ雲やぬくくらん
る根よきるひざらうの花

楊貴妃櫻  重瓣にて
中輪あり

狂楊貴妃の花のうははははは
天のあしはら桜をかりり貞清撰

右の外 墨流櫻 江戸櫻 西行櫻
合虎尾櫻 浅黄櫻 雲井櫻 右明

櫻 滝櫻 委くい本館博物
茎小名木并小花形 はしくの

花笠 花かごと 忌でま
似合ん人い波 其角

花は雪 大伴のむさぶむ
らん花の雪 全

花見酒 非 徳利ねん さり
や花あふ こそ 全

右いり ま 花ふ ま へ う あり
委 く い は 下 め の 所 あり

尋花 新千載 津守国助
は よ と い う の ち り あり ふ

梯 を 流 る の て ゆ く ぬ 日 を さ ら
家集 泊舟尋花 西行

清 出 て た う の 沖 み 見 ま せ く せ は
ま う こ 一 ひ く も さ ら ぬ 志 く 雲

花盛 徒然草に立春の後七十
五日と期 の あり 右

れ も 今 の 甚 早 一 口 の 二 丁 め 五
丁 め 花 盛 の 時 を し ら す

永花百首 為重
秘 ろ の そ だ ん ち ろ 色 よ 志 ら け か ぶ

也 さ ら い の 花 の 日 敷 る あり り

非 玄 北 あ ら ん 回 か や 花 盛 う 桃 室

徹 さ 乃 又 海 う け う 志 さ う 波 文

大 和 路 の 禊 を ち と 花 笠 淡 々

山 や 花 垣 根 く の 酒 ち り 亀 洞
雪 山
狂 香 森 の 扇 乃 風 も ち て 以
今 と さ う り は 花 見 酒 は 宗 恒

落花

山里深山を人稀多
處花の落さじと懸云

家集

西行

本花の核をすれり此の
花のふらぬとさびる春風

夫木 水辺落花 鎌倉天皇

梅むらさひのひびきの夜乃

さむら月夜乃かむれ川風

梅の心実ほ春風 春は雪 花乃綿

入相伝の心 波さるるも 花乃綿

傍まらるるも 花乃綿

花乃綿 花乃綿

冬暮 花乃綿

夕候 花乃綿

暈り 花乃綿

花乃綿 花乃綿

花乃綿 花乃綿

花乃綿 花乃綿

花乃綿 花乃綿

花乃綿 花乃綿

花乃綿 花乃綿

落花之詞

唐 雍陶

勿怪頻過有酒家多情長是惜

年華 夕夕く酒店へユクアヤレレナ

春風堪賞還堪恨 春風ヲ賞美

花 昨即ノ開花ケフハ落花トナルラ

今日ハ老衰トナル世ソカシ

詩 全

明 丘雲霄

昨日看花花滿枝今朝爛熳點

清池 昨日ハ花枝ニ滿テ有レガ夜

浮へ 無情莫抱東風恨作意開

時是謝時 花ノチルモ無情ノ至リ

テ恨ルモノナレバ春風ヲトラヘ

詩 落花五字對句

煙銷垂柳弱 待月水流急

煙銷垂柳弱 待月水流急

風卷落花輕 惜花風起頻

詩 全七字對句 詩礎

細柳擁壇人迹絕 落照春

落花沉澗水流香 且落花

落花寂々啼山鳥 覆地多

楊柳青青渡水人 踏落花

△ 掃ちつとハ禁中宮寺 かくみまご

惜花 花小對して命小もあつる

後拾 能宣

楊花白く名残小大かこらん

夫木 雅經

をわもをむと命ぬふのせれ

詞を不あそぞりし様。ふけくる。

根はく。身よのま。及りあを。

あひゆるは。子枝のひま。うつら。

梢に結る。春雨。風あし。あふぬ。

香ありあふ。風いふ。後ひゆく。

折花。むとむ。名ごりのふ。

るごりのふ。あををぞい。

非 かなやあひわれ。おと。其角

枉 花。うら。夕。あひ。は。は。は。

中。て。あ。あ。て。青。葉。と。あ。可。候

詩 惜花之詞 唐彦謙

紛々後此見花残 今ハ三月ノ

人間モ長命ノ者ハスクナキツ

車覚長繩繫日難 今日ガ本

来リ光陰矢ノ如クナレバ見老人

二成レリ長キ繩ヲ以テ日ヲツナ

ギトメルハ 樓上有愁春不浅小

ナリガタ

桃風雪住關千 上ニ登リテ

二關千ニヨリテ小

三ノ北

三ノ北

三ノ北

三ノ北

三ノ北

三ノ北

三ノ北

桃ノ風雪ヲ見テ香ノ
去テ惜メバ愁浅カラズ

殘花

春はく残る花とて
夫木 入道太政大臣

△名残の花△青葉乃花
梢木のさる。凡より後たゞびさる

△名残の花△青葉乃花
梢木のさる。凡より後たゞびさる

詩 殘花之詞

唐 崔惠童

一月主人笑幾回相逢相值且

街杯 主人家ニ在リテ笑ヒ樂シム
コト一月ノ中何ホドカアルカ

ヤウニ偶泰會シタ時 話シヨ 眼看春

色如流水今日殘花昨日開

ノウツリカハルハ水ノ流レテト
ルナキガゴトク昨日ノ花サカリ

ハ今日ハヤ落キル然レバ酒ヲ
ミタノシムテスゴサレヨイ

詩 殘花五字對句

枝上三分落 山齋鳴過雨

園中一寸深 澗對落殘花

詩 同七字對句

詩 礎

好鳥鳴春歌後院 看殘花

飛花送酒舞前筵 眼偏明

短砌兩餘芳艸合 照殘花

小亭颯旋落花疎 色猶深

海棠

△かきさし△移るる花
異名 花仙の唐おもえり

海外より來る花は海棠と名づ

非 海棠の花のうらやまはる月其角

満棠や蝶の舞を月とて紅

詩 海棠之詞 明 張新

雨滋霞靄入朱顏 二雨ニヒトシホ
花ノ色香ヲ

ニタトヘタリ 月下疑後姑射

還月カゲニナガムルハ姑射最
山ノ仙境ニハタリ

是春工多巧思著將色在淺深
間春ノ造化ノタクニ種々ノ妙

蜀彩淡搖拽弱質不禁露
阿リテ蒼淺深ノ色キヤリ

吳粧低怨思幽懷欲訴風

望中落日青絲騎箔外風

夢裏東風瓊樹枝舞蝶飛

海棠花中ノ仙ト云人ノ詞ニ吾平
生恨ルナレ但シ恨メレキコト

海棠花中ノ仙ト云人ノ詞ニ吾平
生恨ルナレ但シ恨メレキコト

海棠花中ノ仙ト云人ノ詞ニ吾平
生恨ルナレ但シ恨メレキコト

海棠花中ノ仙ト云人ノ詞ニ吾平
生恨ルナレ但シ恨メレキコト

海棠花中ノ仙ト云人ノ詞ニ吾平
生恨ルナレ但シ恨メレキコト

海棠花中ノ仙ト云人ノ詞ニ吾平
生恨ルナレ但シ恨メレキコト

海棠花中ノ仙ト云人ノ詞ニ吾平
生恨ルナレ但シ恨メレキコト

海棠花中ノ仙ト云人ノ詞ニ吾平
生恨ルナレ但シ恨メレキコト

海棠花中ノ仙ト云人ノ詞ニ吾平
生恨ルナレ但シ恨メレキコト

海棠花中ノ仙ト云人ノ詞ニ吾平
生恨ルナレ但シ恨メレキコト

海棠花中ノ仙ト云人ノ詞ニ吾平
生恨ルナレ但シ恨メレキコト

海棠花中ノ仙ト云人ノ詞ニ吾平
生恨ルナレ但シ恨メレキコト

海棠花中ノ仙ト云人ノ詞ニ吾平
生恨ルナレ但シ恨メレキコト

海棠花中ノ仙ト云人ノ詞ニ吾平
生恨ルナレ但シ恨メレキコト

海棠花中ノ仙ト云人ノ詞ニ吾平
生恨ルナレ但シ恨メレキコト

海棠花中ノ仙ト云人ノ詞ニ吾平
生恨ルナレ但シ恨メレキコト

海棠花中ノ仙ト云人ノ詞ニ吾平
生恨ルナレ但シ恨メレキコト

海棠花中ノ仙ト云人ノ詞ニ吾平
生恨ルナレ但シ恨メレキコト

海棠花中ノ仙ト云人ノ詞ニ吾平
生恨ルナレ但シ恨メレキコト

海棠花中ノ仙ト云人ノ詞ニ吾平
生恨ルナレ但シ恨メレキコト

海棠花中ノ仙ト云人ノ詞ニ吾平
生恨ルナレ但シ恨メレキコト

海棠花中ノ仙ト云人ノ詞ニ吾平
生恨ルナレ但シ恨メレキコト

海棠花中ノ仙ト云人ノ詞ニ吾平
生恨ルナレ但シ恨メレキコト

海棠花中ノ仙ト云人ノ詞ニ吾平
生恨ルナレ但シ恨メレキコト

最

最

最

最

最

最

最

最

最

最

最

最

最

最

最

最

最

最

最

最

最

最

最

最

最

最

最

最

最

最

三十一

三十一

三十一

三十一

三十一

三十一

三十一

三十一

三十一

三十一

三十一

三十一

三十一

三十一

三十一

三十一

三十一

三十一

三十一

三十一

三十一

三十一

三十一

三十一

三十一

三十一

三十一

三十一

三十一

三十一

最

最

最

最

最

最

最

最

最

最

最

最

最

最

最

最

最

最

最

最

最

最

最

最

最

最

最

最

最

最

夫木遥見桃花

俊頼

誰々又こそ思ふらん山が川の
その人の花のたのむを

藏王 三千代草

夕べの酒のふりかへてのむ人
さかすかのまね名いそふらん
詞春風。うけうえまは盆。園
生の花。ニ子代。夕日。そそめは

唐吉孫。枝よりそ。遠山。庭
連。花。今日。是。開。く。り。星。の。花

非。花。世。は。は。ら。の。雲。は。絶。紹。巴
雁。不。来。て。ま。ま。そ。さ。る。は。少。移。竹

桃之詞

唐李嶠

獨有成蹊處。穠華發井傍。

山風凝笑臉。朝露涼啼粧。

人ニ以タリ風ニ逆ヘハ笑フ如ク
隱士
露ヲ受レバ涕ニ似タリ
顔應改仙人路。津長。隱者モ桃
ヲ改テ喜ビ咲ヒ仙人モ雷ヲ
見テ路ヲ行クヲソシ。還欣上

林苑千歳奉君王。以テ天子ノ壽
ヲ祝スルナリ

千朶穠芳倚樹斜。一枝枝綴亂
紅霞。桃樹ノ千朶斜ニノビテ
終々タリ枝ニ枝アツテ花ハ
ケルヲ緋ノ。憑君莫厭臨風看。占
霞ノ如シ。斷春光。是此花。春風ニ乘
ノ桃。ナシ春光ハ桃をヨリ外ニハナシ

詩

唐白敏中

種竹交加翠。松葉疎開徑。
植桃爛熳紅。桃花密映津。

桃五字對句

種竹交加翠

松葉疎開徑

植桃爛熳紅

桃花密映津

同七字對句

詩礎

三月 草花
桃花氣暖眼一醉種桃年

春渚日落夢相牽深淺粧

五夜漏聲催曉箭紅欲然

九重春色醉仙桃滿澗香

桃ノ 漢書ニ載ス武帝ノ時一足ノ壽

鳥來リテ帝ノ前ニ止ル東方朔ガ云ク頃テ西王母來ルベシ

トテ身ヲカクス少ラクシテ王母來リテ桃ヲ奉ル此桃

三千年ニ度實ノル仙家ノ桃ナリ屏風ノ後ニカクレタル

豎子此桃ヲ三度偷ミ食ヘリト奏シテルコレニヨリテ世

ニ東方朔ハ九千歳ト云ヒ習ゼリ桃五木ノ精ナル故ニ邪氣ヲ去百鬼ヲ制ス

桃之 漢ノ代ニ劉阮トテ茶ヲ採ル路ニフミヨヒテ山ノ頭ヲ見レハ桃樹ノアリケ

レハ取ラントシテ水ノ深サ四尺ハカリナル所ヲワタリ又

一ツノ山ヲ越ケル時二人ノ女ヲ見ル容顏極メテ妙ナルガ

劉阮ガ姓名ヲ呼ビカケル

ト下地ヨリ相識レルトシ

武陵源 武陵ト云所ニ魚ヲ捕ル漁夫ア

リ或時桃ノ花ヲ詠メテ溪ヲ行フ五六里ハカリニシテ

或ル大家ニ男女有テ彼ノ漁父ニ食ヲ與ヘ馳走シテ

云フ我等ハ秦ノ世ノ乱ヲ避ケテ妻子ヲツレテ爰ニカ

クルツレヨリシ世間ニ出子ハ年數モ覺ヘズサルホドニツ

レヨリ何代ヲ云タルゾト問
フ秦ヨリ魏ニ移リ晋ニ代
リテ遂カ二年代久シキコト
ナレバ漁者モ大ニ心アヤシ
ルニツキ太守ヨリ漁者ニ入
ラツヘテカノ前ノ大家ノア
リシトコロヘエキ再ビ尋子サ
セラレケレドモ其アルトコロヲ
知ラズ尋テ路ニフミマヨヒ
辛フシテ空シ



クカヘリシト有

那馬鑄カ詩アリテ玄都觀

二桃干樹栽シトイヘリ

桃源平志云桃白小

品赤とび入輪らぐ

残雪桃白

八重文輪



詩 緋桃之詞

短墙荒圃四無隣烈火緋桃

照地春 古城ノ荒圃野中ニア

ト坐久好風休掩袂夜来微

雨已沾巾 桃葉受風美人ノ袂

似有微詞動絳唇 桃花ノ礼容

風ニ動テ声アルヲ美 盡日更無

郷井念此時何必見秦人 終日

又桃蒼源ノ桃ノ好ニハ非ズ

李花 異名 東苑 道傍

和名 びらぎを花 出たり

新撰帖 為家

きまぐそふ雪く見らるる山猿乃

詞行山法 空の候風をいぬ

三月 草木
毛孫さかたふ。雪ふも見えぬ

詩 李之詞 唐太宗

毛鶴流桂園成蹊正可尋カケ

谷道ノワケカケ 鶯啼密葉外蝶戲

晚花心蝶ハヨクハ咲ノ巻ニ戯ル

李在獨來教愁情相與懸李在

道ヲイク度モメグリテナクサシ心ノウレハレヌ 自明無

月夜強笑欲風天ヤミナレドモ

テアカレ心ヲ取ナヲレ自ニ笑フ

夕ガレカレ風一テ巻ハチルニイカ

減粉與園籜フクシク 分香沾渚蓮徐

妃久已嫁猶自玉為鈿美人ニ

園裡送明月ハクシク 葉暗青房脫

林頭宿白雲ハナヲマカス 花明玉井春

詩 李七字對句 詩礎

近紅暮看失燕脂キコウク 自無言

遠白霄明雪色奇ユキハク 李花香

石筍街中却歸去イシジユ 花落時

果園坊裡為求來クハエン 白玉堆

揚梅花ヨウメイ 花の早く花咲葉

実のす松りくつ木立ミ

のびゆくす實も酸ノビ

実の大いなるど味もいミ

もより多し植庭ミ

杏花アハナ 新撰六帖 衣笠内大臣

家園ありぬるりの花イハ

詞のいそむのぬる白ひゆイハ

よが名ありぬるぬるイハ

詩 草木

非...
三州六

詩 杏之詞

唐温憲

團雪上晴梢紅明映碧空
白杏樹

ノ梢ニカ、リ、杏、巷、
ノ色天ニ映ス、店、香、風、起、夜、

夜、風、吹、テ、店、カ、ン、バ、レ、
キ、ハ、杏、巷、ノ、ニ、ホ、ヒ、シ、村、白、雨、休、朝、

至、テ、見、レ、ハ、一、村、雪、ト、成、レ、リ、
静、落、

猶、和、蒂、繁、開、正、
夜、雪、杏、

テ、花、葉、帯、ニ、竝、ビ、
淡、然、間、

賞、久、無、以、
静、二、居、テ、杏、

賞、玩、ス、レ、
薛、能、

手、中、
枝、ヲ、折、テ、書、

活、色、生、香、
杏、花、ノ、色、白、ク、

誰、知、艷、性、
向、春、風、笑、

不、休、
杏、花、美、ナ、リ、ト、イ、ハ、
ツ、レ、ハ、艷、色、相、子、タ、マ、ラ、
風、カ、フ、タ、

ハ、チ、ル、ヲ、ラ、ウ、テ、ヤ、ス、
バ、タ、ツ、

詩 杏五字對句

同上

暖、酷、松、葉、
晚、色、連、荒、

寒、粥、杏、花、香、
低、陰、覆、樹、碑、

詩 杏七字對句

詩 礎

忽、憶、華、時、
香、間、遙、

却、尋、醉、處、
湿、胭、脂、

寂、々、孤、鶯、啼、
獨、含、晴、

寥、々、一、犬、吠、
已、續、翻、

本、之、
所、ノ、別、業、二、杏、百、

株、ヲ、植、テ、碎、錦、
坊、ト、名、ツ、
葡、萄、花、
草、龍、珠、

林、檜、花、
名、林、郎、
棗、花、
種、あり、

三月 草木
三ノ花

梨花 名異 曰肥白曰快菓

香雪 百菓宗 雪熊 玉肌

映菓 △棠梨 山野生者

詞務 未 枝みかたなる山梨の

生は 未 詞務 未 枝みかたなる山梨の

連雨 未 詞務 未 枝みかたなる山梨の

非梨 未 詞務 未 枝みかたなる山梨の

梨の花 未 詞務 未 枝みかたなる山梨の

露冕行春 未 詞務 未 枝みかたなる山梨の

移家 未 詞務 未 枝みかたなる山梨の

人其恩惠 未 詞務 未 枝みかたなる山梨の

来ント 東風二月淮陰郡唯見棠

李一樹花 淮陰ノ辺ハ古ヨリ梨樹

冷艶全欺雪餘香乍入衣

丘為

眼ニウ 春風且無定吹向玉階

飛 梨花が春風ニ吹カレテ玉階ニ

魚功ニノ恩惠ヲ蒙リ

天子ニ近シト云ニ喻テ云

木瓜花 本丸のさみ

狂 木瓜のさみ

木蓮花 木蓮花

木 木蓮花

木 木蓮花

木 木蓮花

胡桃花

夫木くはくしをまげこ
くまのそをえおひそ

数多つこの板

そかめり知家

辛夷

木筆 迎春 侯桃
紫菀 紅燭

△四手と板の別々重く花咲あり形
幣のじ故ふあそふと云録

○素方ふてはは揚しとるふの本
ふせふとそをかげくこるふ為家

○俳歌懸れまはむこころ文舟
蟬くやる路はれかたの森市隠

詩 辛夷之詞

崔迪

緑堤春艸合王孫自留玩

クサラツムトテキク 況有辛夷花
ノ人々アツビニ出ラル

時 興芙蓉乱

ヲモノハスノ花トヒトツニミダレアイ
タルケレキヒトレホヲモレロク貞ア
リトナリコラレノ花ハ
ハスノ花ニヨク似たり

躑躅

山石榴 羊躑躅
△火を草

家集 躑躅為山光 西行

けいさく山のいろひゆみそえて
とくくまその名のそまけり

詞 白。こぞ光の色。咲。白つた。

はくし海辺をさそくのうらうら
る岩。雲つた。岩根のほろ。山

路のつと。野松のつと。宋人
妻木は馬のけしそちをそく

夕日。を。夜。の。山
娘の神上はトが。山

小つと。もらつと。あつと。
だんのほろ。まはつと

連。も。宗因

俳。小。其角

狂。笑。丹解

詩。宣城見杜鵑花 李白

蜀國曾聞子規鳥 子規一名八杜 鶴和名ホト

ギス唐ニテハ三 宣城還見杜鵑 杜鵑鳥ノ啼ヲ聞テモノサビシク 思フニ又杜鵑花ヲ見ルニモ古郷

ヲ思 一叫一回腸一斷 鳥ヤ花 出ス

三月憶三巴 三春一テ三月ニナレ 氏春ヲタノレニス今

此所ヨリ三巴ガ見ユ レバイヨク古御ヲ思フ

五渡溪頭躑躅紅 タニホトリニ アカキハ

花サ 嵩陽寺裡講時鐘 山寺ノ 講時ノ

好一月看花到幾峰 春ノ山路 ハイツクヘ

花見事ニアルレ一月ノ内毎日 花ヲ見アルカバ幾ツノ峯ニカ到ラント

花黄 奇ふ岩つとよあり

映山紅 葉少一圓一花赤 又小映山紅あり

或ハ白花の物あり 赤花の 園あり

山紅 白雪ミツリまゑ 中アムン〇ヤ

紅まれ咲 江戸万葉八重う すいろ大アムン〇ハツも紫大

あはれ 小つんさがる

〇峯の松風 雲井赤

白紫 八重大アムン

子規一名八杜 鶴和名ホト

杜鵑鳥ノ啼ヲ聞テモノサビシク 思フニ又杜鵑花ヲ見ルニモ古郷

鳥ヤ花 出ス

三春一テ三月ニナレ 氏春ヲタノレニス今

タニホトリニ アカキハ

山寺ノ 講時ノ

春ノ山路 ハイツクヘ

奇ふ岩つとよあり

葉少一圓一花赤 又小映山紅あり

赤花の 園あり

白雪ミツリまゑ 中アムン〇ヤ

江戸万葉八重う すいろ大アムン〇ハツも紫大

小つんさがる

雲井赤

八重大アムン

躑躅 品類 姫 能垣ろく傍も靴 ぐや姫つじ 一貫

羊躑躅 吉野ニ多ク遠く 見色の蓮花の如

花黄 奇ふ岩つとよあり 新撰花帖 光俊

映山紅 葉少一圓一花赤 又小映山紅あり

或ハ白花の物あり 赤花の 園あり

山紅 白雪ミツリまゑ 中アムン〇ヤ

紅まれ咲 江戸万葉八重う すいろ大アムン〇ハツも紫大

あはれ 小つんさがる

〇峯の松風 雲井赤

白紫 八重大アムン

○櫻川さくさくの中らん
あつ雪。白小まん ○花車。む
ささ大まんまれ咲 ○志やむ
ろ。白むくさけ飛入ささ大まん

藤 紫藤さうり花
松見草 二季草

哥 家集 橋上藤花 顯季

うすくくのうら白ん志のえまを
とれめうーいけ、る花ふま

貞應首 藤花始綻 為家

初まのかみふくはふらふら
さくさく心たたのうー松

詞 ぶびく。ちる。咲。白ん。う。れ。

浦 回子たう花。た。ま。の。花。さ。ん

白ん。池。池。の。花。浪。終。つ。つ。は。源。さ

屋。ふ。も。も。の。野。春。日。野。ふ。ち。野

そ。ら。の。松。の。花。波。さ。き。世。く。る。浪

花。さ。る。松。風。と。れ。れ。松。も。喜。や。多。る。

松。の。も。う。い。さ。さ。る。風。白。ん。ぶ。びく

松。風 由。録 ゆ。り。り。花。色。花。葉。紫。む。ら。り

の。大。川。の。べ。乃。花。さ。も。花。さ。つ。ふ。さ

本。あ。ま。ま。の。雲。の。ま。他。の。花。さ。さ

さ。も。は。の。花。さ。つ。つ。花。が。枝。花。さ。つ。さ

が。り。花。花。さ。ぬ。花。の。丸。ま。つ。花

連。花。浪。さ。さ。の。白。ん。を。目。叱

非。白。花。と。花。さ。る。花。さ。つ。か。其。角

長。く。し。の。字。も。さ。さ。り。花。一。圃

白。花。も。風。に。吹。き。天。乃。川 宗阿

花。さ。つ。り。さ。さ。さ。つ。て。さ。さ。さ。如。泉

狂。紫。の。ぬ。さ。い。花。さ。り。花。の。さ。さ

松。れ。ぶ。り。と。さ。れ。て。は。花。の。貞。徳

詩 紫藤之詞 許渾

緑。蔓。穠。陰。紫。袖。低。客。来。留。坐

小。堂。西 色。ノ。振。袖。如。シ。見。物。ノ。客
来。リ。番。ソ。醉。中。掩。瑟。無。人。會。家
テ。去。ラ。ズ 近。江。南。卷。画。溪 小。堂。ノ。西。ニ。ハ。客。来
不。来。我。小。堂。ノ。中。ニ。テ。瑟。ヲ。ヒ。キ。テ
夕。ノ。レ。リ。且。堂。中。ノ。景。色。ハ。江。南。ノ

美溪ウツリテヨシ

詩 藤花五字對句

野衣裁薛荔 松石備空古

山酒醉藤花 藤花不計年

詩 合七字對句

詩 礎

長蔓纏來山徑樹 碧侵衣

垂花拂盡石橋苔 花無枝

仙人碁局埋幽州 留美人

閑士禪扉閉古藤 院隔橋

妙術

藤の花長く見事の開法

藤の根へ酒とくけ或ひ酒の糟と入るへ藤能くなく花

長く美しく咲たり 扱花咲て 後英の下へ盃酒を入三寸程

あつとあけて次第に盃を ささるるる花長く見事咲て

月季花 日月紅 不断たふ 闘雪紅 花匂くふ

より長春の名あり 然るを 春もつとも花多し 殊に春と

つ名あれば 季とりのみなり

詩 月季花之詞 宋 韓琦

牡丹殊絶委春風 籬菊蕭疎 怨晚叢 菊ハフク秋ウツクシ 何似

此花栄艶足四時 常放浅深紅 牡丹ト菊トハ美ナリトイヘトモ月 季花ノ四季ニ咲テモ、イロクシナイ 色ナクニ及バズ

櫻長春 木ハセウヒ花ハ八重 咲出ハ白く次第

以赤 重本内旁

石楠花 唐人の詩にもあり

似たり (詞) 霞山 分入峯 小なる

山 後分る 乃山人 大峯 仙のくわつのかうまそへまのん

非 山家 瑞香 春是とて木

高き三四尺花丁香の如くありて

紫既小開け 淡紫とて

狂竹垣を履のさぬおどろて

白ひをとり

山吹 順の和名

の事 正字 棟棠 金隸 餘

醜花 玉蕊 銀葩 春 紀念草 鏡

草 面影草 菊の花 黄色と

本色と 山吹の花 白とと正

色と 守良峯の宗貞へ 山吹の

花を夜を ちたれととととと

とあり又ととととととととと

つんととととととととととと

花咲此歌はよりて 山吹をよ

み合せたる 黄色の事たり

家集 定家

詞 咲ちた 八等 いろ色 いろ

は 川原の山吹 秋うつる 志川 枝

とありと波からりゆく 井子 井

露 山吹の事 山吹の事

東菊 花菊子似て 梅花 似て

櫻草 種類数多あり

濃紫白油源 濃紫の咲く紅白をいへる

氏薄紫 源 旌節草 九輪草

櫻草 似て花 海老根 化偷州

荒世伊登字花 花

丁子草花 葉柳子似て花丁子

仙臺萩 萩似て花黄く首宿

華鬘草 花形ケシと似

碎米薺 蓮華花五形ともかく

母子草 鼠薺 米薺 鼠耳

無心草 佛耳草 非なるべざる

妙術 治痰嗽術 母子草花

小粉團花 花の形粉團花に等

馬酔木花 三叉圖云能繁茂と

蘇枋花 紫荊花赤色と染る木とい別

荷花紫艸 非 根とや蘇枋

白茅 茅花の形白又と根と

新乃のの 根と

詞生の多。つばな流る。やふ出。志は生
俳 迷ひ子のつるを捨てはくさ青芽

茨花 雞頭。雁頭。水落。葉
くすくす大花紫あり

馬蘭 葉長二三尺幅三分花六
瓣淡紫色小あやふ似う

眉作花 薊△鬼あざこ。花乃
形り眉拂ふ似る故

名づく一説ハ鬼筋とつう

非 走らふも二拵へてまの仇東起

美人艸 異名 虞美人
麗春 錦被

非 せしめをひいてちいさー

非 せしめをひいてちいさー

海金沙 吹ぼる。あまづる。やぶる。
くさくさ ともあがる。大和と三味

繅つとつゝ宿根より生とる
つづ草より莖甚とつづ

堇 △昔堇△昔葵△俗ハ相模草と
いふ花ひくさたいろあり

堀川百首

公實

ひくさくさいかほ相のあれふたり
はままうとまのともさのこころ

非 せしめをひいてちいさー

非 せしめをひいてちいさー

非 せしめをひいてちいさー

非 せしめをひいてちいさー

非 せしめをひいてちいさー

金盞花 長春菊 花金紅色
大 指頭の如形 毒花

檳榔花 木李 木梨 花五弁
淡紅色 外國の花欄 刻

黄精花 葉竹小似て 尖らす花青
白色実ハ白して 黍粒の如

三月大根 楊花蘆葍 春日
葉と食ふ花淡紫

櫻桃 花梅のこく少くして白
葉凹く尖り毛あり

梅若葉 新小生 秦椒若葉
いろのいろが 葉のいろが

麻子 荆芥 香薷 茵 胡蘆

菊 此月苗を振りよふち 肥を日強 移栽

仙蓼 芭蕉 秋海棠 芋 大角豆

橘 冬青 木槿 楮 是ら此月

接木 杉 橘 柑 柚 香 檉 等 清

明の前後小はてして

生類 三月一ヶ月の諸の 生類をあるす

呼子鳥

古今三鳥のひみ かりさぬくの習ひ

あれどたが深山に鳴て物まびく

き鳥と心得てよむべし古今

の音いりておぼつらきくまこ

呼といふるん小もよみへんかき

夫木 赤入 我せことむじのふはくをとり

君よびうへせ長はさひぬとこ

日 曉呼子鳥 左京大夫

夜とのこは松をふりてをよこさる

人もさくえぬ志の免のそく

麥鶉 非 居るのぬまれ 弓

残る鶴 二月小引さくる鶴乃

雲小入鳥 鳥沖雲とも云

鳥帰も同ド

事より鶴雁鳴及びりり

くの鳥の古巢は端を去の

心たり天津雁といへるもより所

あり雲入鳥の奇連俳とら

三月盡古巢へ帰る心と結び侍る

津守國基

鳥 和朝小は渡鳥より背 小紫赤と交る羽あり

印の前の白とまん丸を毛けり
まうた所あり南方の國はかり
東南へくびて北西へとをさるる
その声りやこくくくくくゆ名付と
りり寒氣と嫌ふ鳥よて日行
方へくと向ふことと霜露を畏
るるゆ朝の日出る内と夕暮
ぐと出ると稀きりさぬく

夜分ふる時樹の葉を背上の
覆ふて飛は雀豹が古今法見う
非あまこふははあまふあま自飛

詩 鷓鴣之詞 鄭谷

暖殿煖無錦翼奇 鷓鴣ハ寒ヲ
テ暖ナル日野四ニタハフレ翼ノ品
ウツクレキコト錦ノゴトシト品

流應得近山雞シヤコノ風流ウ
雞ノスガタ 兩皆昔州湖邊過フ
ニチカシ

ラントスルトキハ昔草湖ト云フミツ
ウモノ返ラズスギテ寒ヲサケル

花落黃陵廟裏啼 三月ノ末ニ廟
ノ裏ニテナク

コレ春ノ終ルニルシナリ黃陵
ト出スハ昔草ノ對ニスルゾ遊子
乍聞征袖濕佳人纔唱翠眉低

鄭谷征役ヲ蒙リテ旅遊ノ身
ナレハ鷓鴣胡啼ヲ聞テ古柳ヲ
思ヒカナシニミナミダ衣ヲウルホセリ

美人ノ哥モ自然ト眉ヲヒソメテ
モノカナシ 相呼相喚湘江曲苦
キテイナリ

竹叢深春日西 湖水ノホトリ竹
日ノコロ啼キサケブヲキケ
ハイヨクモノカナシキトシ

蛤 今月食用可シ蛤あまもつん
海浜で取事といふこと

貝 今そむ二見のうの蛤瓜
貝ありとそむはふきり西行

能 雀いもやぞ 衆名はたけつ其角
狂丹波山が栗は下る秋の道と

櫻 貝 櫻貝 非 夜や
後者浦の着れ 舌蹄てふ
とぬぐり 淨文

櫻 櫻魚 櫻魚
貝長吉 櫻魚 櫻魚
川魚 櫻魚

東南(行)日和晴ても曇りても
 南風吹出せば雨とある○南風或は
 東南より大風吹出せば曇らう
 とすも頭雨とあり○暴水出さ
 今年中風雨後是と桃花水と云
 ○暖ふるるに比寒まら雨あり
占候 時蝕あるは大水とまる
 甲寅甲申乙卯己丑辛
 寅壬巳以上の日以雨あれバ米價
 貴○辰の日雨ふれハ百虫生と
 ○上半月雨あるは **養生** 此月
 魚多く捕まると
 臟氣伏火壯水死醜と食一
 肝の臟と助くば幾世に然む
 西北の風ふるるは久濕地小居る
 ころあるは **溜中暑** 今月辰の日綿
 の袋よりとんの粉を食て風の
 とく所は掛け置と夏暑氣ふ
 める時水にゆく
 て腹と一即ち治と

三月飲食料理献立

禁 小蒜 雞卵 鳥獸の五臟を
 物 其のらつとる 非此月食す

べうは熱病好 今月中ハ甘と
 を殺とる 物と食と可す

料理 汁
 大椎茸 大根 人参 山椒
 たんや ぬこ ちさ

清汁
 塩がも すすきの ちやうり
 大根 人参 山椒

鱠 赤貝 大根 人参 山椒
 大根 人参 山椒

さいふゆ さいふゆ さいふゆ
 さいふゆ さいふゆ さいふゆ

まて 葉せうが 生さつら 葉せうが
 まて 葉せうが 生さつら 葉せうが

差味 さいふゆ さいふゆ さいふゆ
 さいふゆ さいふゆ さいふゆ

蓋屋 菊の實蘭のおぼしを

とり去るべし 辟鼠術 かのへ午

の日鼠の尾を斬り血をとり
屋梁にぬれし永く鼠来らず

妙術 辟井邊百虫法夜
分雞鳴く時黍を炊

と其釜の湯を以て飯を令
器の置所鷹等々井のやう

かてあまひく洗へば百虫の類
井の近所あまひく近づくと

極て驗あり 絶蟻蚰法 螺螂と

取水小浸し置節小入日其

水と墻壁をそくせば長く蚰

蚰とくみ 白髪去術 三月八日

十日十三日此日早朝ふあはて

東の方ふひくひて白髪とぬ

く登り跡より生へる髪悉く

黒くあがり尤若と人乃白

髪をとるこそ

をかりて妙なり

三月之部終



